資料１

評価専門調査会（第140回(令和3年度第1回)）における主なご意見

評価専門調査会における主な意見

１．本年度の深堀分析の対象テーマ（「研究環境の再構築」）に係るご意見

（追加指標について）
・技術専門員や支援職員の充実等、サポート人材について考える必要がある。
・基礎研究や萌芽的な研究を支援するため、事務作業削減という観点の議論が重要。
・論文数だけではなくて、研究の多様性をうまく評価できるような評価軸が考えられないか。
・研究支援の観点を追加すべき。例えば、予算の問題で、それぞれの大学で読める電子ジャーナルの数やタイトル数は減っている。論文の投稿料が高い雑誌と、インパクトファクターなどは相関している。
・長期的な発展のための研究基盤への投資をいかに評価していくかも重要。
・大型機器の整備（予算額等）を指標とできないか。

（Society 5.0実現の視点、国際的な比較等について）
・第６期基本計画の目的はSocitey5.0の実現であるので、評価する際に大きな認識として、研究力にしても最終的にすべてSoitety5.0に向かって進んでいるのという姿勢は共通で持っておくことが必要。
・マクロな視点で、何のための指標による評価か常に立ち帰ることをしないと、ミクロな世界にどんどん入ってしまう。
・社会実装を意識した評価軸を検討すべき。
・社会実装に向かった評価はベンチャーなどに偏るため、基礎研究の評価とのバランスを考慮すべき。（同様の意見複数）
・他国との比較を相対的に考えることが必要。

（ロジックチャートの構成等について）
・ダイバーシティを女性活躍の観点のみで考えるのでは足りない。性別に加え、国籍、経験等の観点もある。
・グローバルのダイバーシティの観点は重要。外国人から見た世界の課題をとらえるべき
・博士課程への進学が進まないのは経済的な心配等から来るというロジックは正しいか。学生が望む教育が行われていないなど他にも理由があるのではないか。

評価専門調査会における主な意見

２．全体の進め方、評価手法など他のテーマの検討にも係るご意見①

（計画全体の評価、手法について）
・「進捗状況の把握」とは、具体的には大目標、中目標、施策群、主要指標なのか明確にし、共通認識を持つべき。
・大項目の検証にはロジックチャートの切り出しだけでは十分ではないのではないか。

（ロジックチャートの妥当性、改善について）
・見えない指標、確率的なパラメタ、相乗効果など様々な要因があるので、説得力のあるロジックチャートを作るのは簡単ではない。
・ロジックチャートの正しさを検証するために、リソースがあれば調査も必要ではないか。

（新たなデータの取得、エビデンス調査について）
・アンケート等の調査を検討する場合には、コストに対する実入りも考えながら行うべき。
・指標とかデータ、エビデンスが存在していないものについては、獲得するための効率化やデジタル化も考慮しながら、本質的に、本当にそれが必要なものなのかどうかということを十分検討して進めることが必要。
・多様性について考える場合、同じ指標であっても、指標の経年変化、差分、データベースの各項目の相関をみるというやり方もある。
・様々な成果を取りまとめるツールにおいて、デジタル化で進んでいる。現場が手入力しなくていいような指標を積極的に活用すべき
・データを取得する仕掛けを検討することも重要

（タイムラグについて）
・指標を取得する場合にリアルタイム性がないことが課題（同様の意見複数）
・施策のインプットとアウトプットのタイムラグについても考慮をしないと、施策の評価を誤った判断になりうる

（第５期基本計画以前の取組について）
・第６期基本計画の妥当性を議論するためには、第５期基本計画以前の土台の理解が重要

（評価指標の現場への共有について）
・重要な指標は研究者等において共有され、現場の運営とか研究者のインセンティブになるような話が現場で行われるべき

評価専門調査会における主な意見

２．全体の進め方、評価手法など他のテーマの検討にも係るご意見②

（多様な評価軸による評価について）
・例えば、以前は基礎研究でノーベル賞をめざす研究がよかったが、最近は、応用や社会実装につながることをしなければならなくなっている。やることが増えているので、いろいろな人材が必要となっており、多様な評価軸をどうやって評価するのかが、容易ではない

（価値創造を促す指標の検討について）
・科学技術力が競争力に繋がるようにするためには、価値につながることを促すような指標としなければ研究者は動かないだろう

（融合分野の人材等の指標について）
・知の交流という観点では、融合分野に取り組む人材、新しい分野がどれだけ生まれたかという点も指標として考えられないか。

（人文社会を評価する指標について）
・人文社会学者の方の評価もきちんとできるように考えるべき。

（各府省の政策評価・プログラム評価との連動について）
・第６期の基本計画では各省の責任が明確になっているので、各省の評価と連動し、各省の取り組みに効果があるかを確認できるだろう。各府省の、政策評価、プログラム評価と連動させるのかを考える必要がある。

（時代の潮流や国際情勢への対応について）
・デジタル庁発足により、施策の戦略も変わってくるので、状況の変化を把握したり、戦略の見直しをしたりする必要もでてくる。
・第６期基本計画の大目標や中目標に書かれていたことだけを追っていくのではなく、時間とともに作り替えていく柔軟性も検討すべき。

（アジャイルな視点について）
・エビデンスベースでみるという新たな取組であり、シリアルなPDCAというより、OODAループを回すような形で状況をクイックに判断したり修正を加えるというようなアジャイルな視点も必要である。